

## 2. 動物介在教育・療法における共通理念と馬の評価方法

局 博一

東京大学大学院農学生命科学研究科

### I. はじめに

馬介在教育 (*Equine-assisted Education*) や馬介在療法 (*Equine-assisted Therapy, Hippotherapy*) の最終的な目標は人の心身の健康増進を主目的とした人間社会の福祉の向上にあるといえる。この分野が広く社会に認知され、普及するためには、馬の適正を正しく判断できる評価者 (Evaluator) の存在が不可欠な要素であると思われる。また、馬介在教育や馬介在療法そのため、馬にかぎらず動物を介在させた教育活動や医療活動を実施するにあたっては、動物の適正度を評価できるとともに、人側の健康状態をも理解できる人材の存在が必要になるとと思われる。つまり、動物側と人側の両方を理解できる基礎的な素養を持ち合わせた人材がこの分野の発展においては強く望まれる。馬介在療法あるいは動物介在療法は少なくとも補助 (補完) 医療としての要素を包含しており、少なからず人の健康に影響を与える。その意味では、通常の動物介在活動よりも一層の責任を伴う行為であり、目標を達成するためには十分な教育と資格認定が必要になるものと考えられる。馬介在療法では、その実施のために到達点 (エンドポイント) の設定、治療プログラムの構成、記録、報告、インフォームドコンセントが必須である。馬介在療法の普及のためには、一定水準の知識と技能を備えた“馬介在療法士” (ヒポセラピスト) の資格の取得が可能な新しい教育制度 (認定制度) の設立が求められる。満足のいく成果が得られるようになるまでには、これまで日本国内で培ってきた経験と、諸外国での制度の一部導入など、様々な観点からの検討が必要になる。

一方、馬介在療法の実施のための適切な馬 (“セラピー馬”) を評価するための特別な評価者 (Evaluator) の存在が必要である。馬介在教育・療法を発展させるために欠かせない要素を図1に示す。

### II. “馬介在療法士”教育カリキュラム

動物側と人側の両方を同時に教育を受ける機会は世界的にみても極めて少なく、これまでの教育研究体制ではカバーすることができなかった新しい分野であると考えられる。日本動物介在教育・療法学会はまさに

このような境界領域を学問的な立場から推進する学術団体として貢献しう社会的役割を担っているものと思われる。

人材養成のための教育面では、獣医学 (生理学、形態学、疾病学、動物行動学、動物由来感染症学を含む)、動物倫理学、ヒトと動物の関係学、作業療法学概論、理学療法学概論、リハビリテーション学概論、ヒトの運動生理学、臨床心理学、(小児)発達心理学、視聴覚・言語学、広範性発達障害の神経科学、加齢の科学などの教育カリキュラムが重要と思われる。一方、馬側については、馬学 (馬の一般生理学、形態学、運動科学、行動学、消化器病学、運動器病学など)、馬の馴致・調教概論 (講義、実習) の学習が必要になる。図2に馬介在療法士育成カリキュラムの

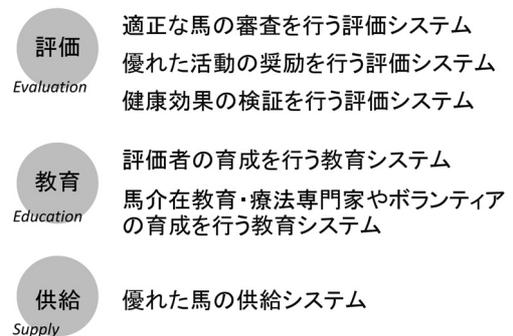


図1 馬介在教育・療法の発展に欠かせない要素

#### 動物介在教育・療法概論

- 馬学Ⅰ 生理学(ストレス生理学含む) 形態学 外貌
- 馬学Ⅱ 運動科学(歩様含む)
- 馬学Ⅲ 疾患学(跛行、運動器病、消化器病、皮膚病、感染症)
- 馬学Ⅳ 予防・治療概論
- 馬学Ⅴ 馴致・調教概論
- 馬学Ⅵ 馴致・調教実習

#### 作業療法学概論

- 理学療法学概論
- 発達心理学概論
- 臨床心理学概論
- 視聴覚・言語学概論
- 広汎性発達障害概論

図2 “馬介在療法士”育成カリキュラム (例)

例を示す。この場合、作業療法学、理学療法学、医学などをすでに履修した人は人側の教育カリキュラムの受講を免除されるなどの互換性も考慮の対象となる。

### III. セラピー馬の評価

セラピー馬評価者は、馬介在療法に長年の経験があり、馬の心理、行動、健康に対する深い洞察力を有する人が指導的な立場で携わることが望ましい。セラピー馬は従順さに加えて、新規環境や不意の刺激に対しても動揺しない性格を持つことが要求される。そのためには馬自身の経験度が問われる。人との間に絶対的な信頼関係が築かれていることが基本的に重要である。セラピー馬の評価項目の例を図3に示す。馬介在療法の実施においては、クライアントの乗馬、下馬の際の静止、安定した歩様（常歩、速歩）、リーダーの指示に従った発進、一時停止、再発進、歩行中のクライアントの動作への受け入れなどが問題なく遂行できることが求められる。これらの行動要素は特定のクライアントや馬の飼育管理者に限定されることなく、誰に対しても同程度の反応を示すことが必要である。

### IV. 馬介在療法士の育成のための協力体制、組織

馬介在療法士の育成のためには、セラピー馬評価者、乗馬インストラクター、獣医師、作業療法士、理学療法士、医師などの専門家の相互協力体制が必要である（図4）。また、馬介在教育・療法の真の発展のためにはセラピー効果や適応症例などに関する科学的研究の推進が必須である。さらに、セラピー馬およびクライアントのストレス度を評価するためのストレス指標の開発（行動学を含む）と基礎データの蓄積が望まれる。

### V. むすび

馬介在教育・療法が一つの独立した分野として成長するためには、従来の既成概念にとらわれない柔軟な考え方や、医療分野における理解と協力が欠かせない。この分野はヒトと動物が共存する未来型の福祉の一形態であり、将来性の高い事業と思われる。なお、近年になって馬介在療法は作業療法学などの分野を中心に研究が進められており、科学的な評価に十分に耐えうる研究報告が多く発表されるようになってきている。

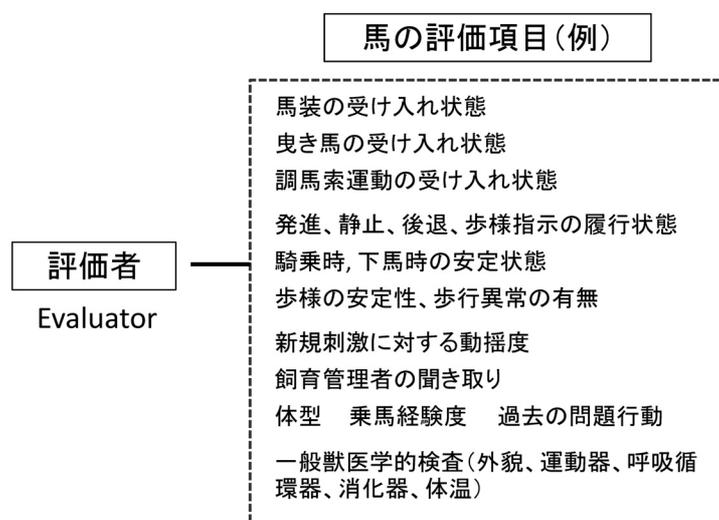


図3 “セラピー馬” 評価者の馬の評価項目例



図4 “馬介在療法士” 育成に向けての体制